



第三回「観月、神楽の夕べ」

〔於 新居浜市一宮神社〕 田 窪 久

第三回「観月、神楽の夕べ」が、去る九月十六日、新居浜市一宮神社に於て、神青会員、雅楽愛好者、椿石鏝両神社巫女さん、南予伊予神楽保存会、久万山五神太鼓保存会の人々、およそ四十名の出演者により、午後七時より盛大に開催された。

当日、午前中は申し分の無い好天気一宮神社でも境内にて開催を決定し、早朝より関係者の方々の御奉仕により、早や昼過ぎには、舞台設備や、音響照明設備も、ほと、万端整っていた。ところが、である。丁度集合時間の三時を過ぎる頃から、何と小雨がバラつきはじめたのである。「なあに、大した事はない、直ぐに止むだろう」各々、そうつぶやきながら、準備を押し進めた。しかし、雨は一向に止みそうにもない。だんだんとひどくなるばかりである。不安そうな、会員の面々。そのうち、土砂降りとなる。垂木たなぎに吊り下げら

れたいくつもの提灯が、雨風に揺られながらさびしげに光を放つ。何と心細い光景であろうか。そして、舞台を、観客席を、容赦なく雨足が叩く。「なんでこんな時に限って！」全く、最悪の事態である。しかし、それでも何とか境内開催を、という望みは捨て切れなかった。それでもいまかいまかと祈るように黒雲の切れ間を待った。しかし、時計の針は既に五時四十分を指していた。

「もう駄目だ。もうあきらめよう。もう時間が無い。」その様な声が、会員のあちこちから上りはじめた。これ程までに、境内開催でという事で邁進してきたのに。一宮神社関係者の方々の落胆ぶりは大変なものである。

もう何を云っても仕方がない。前日より予約しておいた福祉会館へ移動するしかない。開演まであと一時間しかない。観客も三十分前には入場

するだろう。これは大変な事である。神社より会館へ二、三台の車で、人を物とをビストン輸送である。太鼓を、装束をそれぞれに手分けして楽屋へ運び込む。かなり広い会場である。正面に舞台、三百近い据付の観客椅子天井も高く、照明、音響設備もなかなかのものである。

直ぐに打合せには入るが、何と休日の為、職員が一人しか出勤していないとの事。これでは照明も幕引きも全て自分達でやらなくてはならない。今までのんびりしていた神主さんも、たちまち照明に幕引きにと早変わりである。演奏者の位置、舞人の間隔、楽器の調律から、音量の調整等、きめ細かな打合わせに、全員があわただしく走り廻る。手早く、提灯とかがり火が置かれ、舞台に趣を増す。久万からの五神太鼓は未だ到着していない。開演二十分前、観客席も、ぼつぼつ埋まり始めたようだが司会者も最後の打合せに余念がない十分前、白装束に身を包み、愛用の楽器を手手に、所定の場所に着座する。頭上からの照明が眩しく照りつける。暑い。果して練習通りうまくいくであろうか。笛がうまく鳴ってくれるだろうか。境内でならま



だしも、この様な会場での舞台となると一段と緊張の度合いが違ってくる。司会者が舞台の前方に進み出る。「開演宣言」である。関係者挨拶と続き、そして幕開けと共に開式太鼓が鳴り響く。後方スクリーンと白色の演奏者の見事なコントラスト。越天楽が会場いっぱい流れれる。「暑い」汗がタラタラと額を流れ落ちる。幕が下がる間もなく、次の準備にかゝる。「豊栄の舞」である。観客の視線が一転巫女さんに注がれる。巫女さんは、幾度となく上京を重ねての猛練習、さすが拍手の音も一段と高くなる。二人舞による朝日舞も難無くこなす。さあ、次は南予神職の方々による、伊予神楽である。今日、見せ物的な神楽が増えつゝある中、舞台中央に祭壇を舗設、先ず神への奉納である事を印象づける。神職が受け継いできた、全国でも貴重な存在である。力強い太鼓の響き軽やかな笛の調べ、そして素朴で華麗でスピーディな舞。実りの秋には遠い昔より豊作を感謝し、神人一体となり舞い明かすという。秋の収穫に至るまでには、毎年毎年いろんな辛く苦しい事があったに違いない。豊作の嬉し涙に舞い、不作の悲し涙

に舞い、複雑な気分であった事であろう。特に「花神祇」の舞は庄巻であった。神楽の興奮も冷めやらぬ間に「浦安の舞」となる。全国神社祭礼の花ともいふべきこの舞を正装にての御披露である。万民共通の願い「平和しき世を」と、のびやかに静々と舞う。何とこの装束が日本女性に似合う事か。退場を惜しまれての幕引きである。やっと久万山五神太鼓の方々が到着されたようである。皆さん仕事を終えてからの参加との事。休む間もなく、舞台上に踊り出る。肩にまで伸びたる長い髪、天狗を思わす大蛮の面、そして薄い布地の陣羽織、舞台を踏みならし、所狭しとばかりに太鼓の乱打である。奥深い久万の山々、昔はきつといろいろな宗教が栄えたに違いない。このような奇怪なるものがいても不思議ではなかったであろう。観客のお子さん達も、目を丸くしての観賞である。着面、速い動きとなれば、これはやはり若い人の芸能であろう。楽屋に戻られても、全員暑さで顔が紅潮気味である。汗を拭う間もなく、遠い久万の山路につかれたようであった。やっとの事で終演である。あっといふ間の二時間半。全員、安

堵で顔がほころびます。一年間の練習の成果はどうだっただろうか。少々まずかったのでは？。いやいや上出来だ。いろいろな思いがこみあげてきます。恥ずかしくない公演をせねばと、合同練習の時は皆一生懸命であった。そう、あの気迫があったからこそ、今度の公演を押し通せたのかも知れない。痛恨の雨を除けば大きな失敗も無かったし、本当に皆良くなった。あの伊予神楽の中では、伝統を守ろうとするきびしい中にも我子を見守る暖かな父親の眼差にも触れる事ができた。激しい雨の中、遠い久万より駆けつけて下さった、三島神社の氏青の方々、公演の施設から段取りに奔走していただいた一宮神社関係者の方々、こんなに熱心にこんなに力強く神社を、そして伝統芸能を支えていこうとする人達を目のあたりにみることもできた。全員で考え、動きそして力を尽くした。夕方の雨がうそのようにあがった。夜道を、一宮神社へと引き返す。雨に濡れた社頭の寂けな舞台の佇まい。会場での興奮がうそのようである。次回は南予でと決まった。古へなるまの為、心を締めてかからねばなるまい。

(吹揚神社禰宜)

第十二回四国地区 神青・氏青合同研修会報告

曾我部 英 司

南国高知、去る八月二十一日、二十三日の両日、天皇陛下御在位六十年と銘打ち、第十二回四国地区神青・氏青合同研修会が開催された。

愛媛県よりは、矢野会長を始め、九名が参加。神青・氏青会員約八十名が、高知市内のグランドホテルに集い、来る神宮式年遷宮に関する件等、講演が持たれた。

研修会は、二十一日午後一時に幕を開け神宮遷宮委員、和田年弥先生の講演「神道と式年遷宮」に始まった。

同日夜は、御来賓、講師の方々を交えての懇親会。親睦を深めんが為盃が交わされ、談笑は、やがて燈のともる街へと流れて行った。

翌二十二日、午前六時三十分、高知天満宮へと正式参拝。朝も早い澄んだ空気に拍手が響く。

後、会場に於いて講演、質疑応答意見発表等なされ、午前十一時三十分をもって閉会。

次いで、市営グラウンドに移動。恒例の四国四県対抗ソフボール大会が挙行された。

我が愛媛県チームは、徳島、香川と対戦、残念乍ら敗退。次回へと希望を繋ぐことに相なり、高知を後にした。

神宮式年遷宮、「天下の御祈祷」
「二十一年に一度の世直し」と言われるが如く、我我神道人は固より、大和民族全体の重儀である。

この重儀、我々祖先の培って来た伝統、文化、技術と言ったものを、持統天皇の御代第一回御遷宮より、その時々々の我々の祖先が現代まで継承し、かつまた現代を生きる我々も同様、祖先の心を心とし、未来永劫まで伝えようとしている。

正に「惟神の道」である。微力たりともなり得ぬ身ではあり乍ら、大和民族の素晴らしさを再認識する。

「先進国日本」、世界に冠たる我が国の昨今、化学技術、また医学等も進歩し、機械化は進み、合理化され所謂かつての「不治の病」も解消され、また、されつつもある。

確実に世の中が進展して行く反面、悲しい哉、失われつつある、また既に失われてしまった伝統、文化と言ったものもある。

「神宮式年遷宮」、単に宮を遷すのみならず、二十一年に一度の神事、儀式のなかに、我々大和民族の根本を流れるメンタルなものをも、次に代に伝え行くものではなからうか。以上、簡略乍ら愚感を添え、過日の報告とさせて頂く次第。

研修会参加者芳名(敬称略)

矢野 哲夫 (一宮神社)

清家 貞宏 (八幡神社)

重松 正寛 (伊予豆比古命神社)

御田村俊一 (伊予豆比古命神社)

池内 公和 (加茂神社)

柳原 宰 (厳島神社)

三輪田長貞 (日尾八幡神社)

湊 照彦 (石鎚神社)

曾我部英司 (石鎚神社)

以上九名

神道青年の歌

作詞 村岡俊司
作曲 黛敏郎

一、日本のあしたを告げて
あたらしき光はきたる
若人の希望の歌は

なつかしきみどりの列島を
ゆるがせて 高くとどろく
ああ ひんがしの 美し国に

二、たたかひの 終りを告げて
ひとすじの 啓示はくだる
若人の 悲願の歌は

いにしえの しらべを今に
ひさかたの 天につらなる
ああ とこしえに 御祖の神の

誓いをうけて 栄えある われら
三、 たちあがる 息吹きを告げて
民族の 歩調はひびく
若人の 誇りの歌は

くむ腕の 血汐とたぎり
はらからの 胸にたか鳴る
あああかつきの 雲路をわけて

世界の空に はばたく われら

禪をはいた海亀達

御田村 俊

この珍妙なる題には理由があるのです。想像して下さい。ここは海亀の上陸産卵地で有名な日和佐の大浜海岸、横列を組み肩まで海に浸かった鉢巻に禪姿の大男達が今しも打ち寄せて来る波に足元を拘われて将棋倒しの如くに次々と転倒して行く様を。或は、くらげに刺された痛みを堪えながらも大被詞を奏上する必死の形相を。……正に禪をはいた海亀達の奮闘です。……

これは去る九月五日、六日の両日開催された第十回神青四国地区神道行法錬成会における禊の模様です。私は今回の錬成会に参加致し、これを意義深く且つ不謹慎ながら愉快なものであったと御報告致します。さて、この毎夏恒例の四国四県合同の神道行法錬成会、名称は固苦しい印象を与えますが、内容は簡潔明瞭にて要は行事として捉えた禊・鎮魂の体験研修の会であり、十周年目の節目を迎えた今年は、徳島県が当番に当り会場を海部郡日和佐町日和佐浦に鎮座する日和佐八幡神社(宮

司永本正義様)とし、四県より約五十名の参加者が集って開催されました。本県からは清家・本多・重松・池内・佐藤・三輪田の諸先輩と私の七名が、車にて片道六時間の行程をかけて参加致しました。私自身は昨年に続いて二回目の参加でしたが、今回は、本会発足十周年を記念して石上神宮より森宮司様を道彦・講師としてお迎えするという事で、正統な禊並びに石上鎮魂次第を研修させて頂ける希有な機会となり、又、禊場となる大浜海岸が前述の通り海亀産卵の地であるということでもしかしての期待も重なうって、私には秘かに期するものがあつたのでした。結果としては、僅か二日の短い期間にて私が両行事の真髄を体得し得る筈もありませんが、森宮司様の御指導に依り私なりに其の真意について再認識させて頂くことが出来ました。(両行事の真意については私の未熟な表現力で記述するまでも無く、皆様御認識の通りですのでここでは割愛致します)。本会が昨年以上

に意義深かったと報告する理由はここに有るのです。では愉快だったとする(不謹慎は承知ですがこの表現が今回のポイントであり、本会が持つ一種ユーモラスな面を知って頂く為に記しました。)部分について申しますと、まず海亀については産卵期がすでに了っておりその姿を見る事が出来ませんでした。(但し宿泊場所の国民宿舎うみがめ荘には数頭の飼育された海亀がいた。)しかしそのかわり自分達が珍妙な海亀を演ずることになったのです。この大浜海岸は瀬から数歩も進まぬうちに足も届かぬ深淵となっており、引き波の厳しい海岸であり遊泳禁止地区となっていました。禊前の私達の危具が当るのです。一日目の禊。神社にて行事説明を受け練習も了へ隊列も正しく進み行き被詞から気吹までの次第を経て全員が海へと身漉し入り振魂と共に大御名を奉唱し大被詞を幾数行か齋唱した時でした。突然大波が打ち寄せ私達の足元に白い波頭を立ててくずれたのですからたまりません。加えて不安定な足場も災いして大の男達と言えども踏みこたえることが出来ずに、前の者が後の者を巻き込みながらさながら将棋倒しの

如く次々とくずれ倒れて行くのでした。本来ならば鉢巻をした頭が並んでいる筈の海面には禪をした尻が浮かび、足や手が四方八方に無造作に突き出されているのでした。「親亀こけたら……」の詞ではありませぬが正に季節はずれの海亀のよう。しかし雑言を上げる訳にもいかず顔を見合せ苦笑をこらえながらも人々は大被詞を奏上しようと必死でこれを探り返すこと数度、やがて禪の中を砂だらけにした人々は浜に上り、しかし何事も無かったかの如く鳥船を行い始めたのでした。翌二日目。昨日の教訓に依り潮の流れの穏かな所に移動して禊が行われ、実際昨日の様な「転倒禍」は起こりませんでした。が、しかし新たななる「くらげ禍」なるものが我々を待っていた。以上後半やや漫言に過ぎた記述となり反省していますが、本錬成会が有意義にして且つ印象深いものがあったことをお伝えしたかったので。禊・鎮魂の明解は体験研修と併せて他県の神職の方々と親睦を深められる絶好の機会である同会に来年以後もより多くの参加者が集われることを願います。

最後に今回の参加にてお世話頂いた日和佐八幡神社永本宮司親子様並びに徳島県青年神職会の方々に御礼を申し上げ、終りと致します。ありがとうございました。

昭和六十年
寄附助成者御芳名 (順不同)

- 金 拾五萬円也 愛媛県 神社庁 殿
- 金 拾萬円也 伊予豆比古命神社 長曾我部 勝殿
- 金 七萬円也 和 靈 神社 三輪田 元亮 殿
- 金 五萬円也 石 鎚 神社 武智昭典 殿
- 金 參萬円也 神社庁 大洲 市 支部 殿
- 神社庁 宇 和 山 支部 殿
- 金 貳萬円也 神社庁 久 万 支 部 殿
- 浜出稻荷神社 星 野 暢 廣 殿
- 金 壹萬五仟円也 神社庁 八 幡 浜 市 支 部 殿
- 金 壹萬円也 八 幡 神社 清 家 貞 雄 殿
- 大宮八幡神社 真 鍋 和 敏 殿
- 天 滿 宮 小 池 稜 威 雄 殿
- 神 社 庁 小 田 支 部 殿
- 神 社 忽 那 島 支 部 殿
- 金 六仟円也 神 社 南 宇 和 郡 支 部 殿
- 金 五仟円也 神 社 庁 大 三 島 支 部 (58 年 度) 殿

- 神 社 庁 大 三 島 支 部 (59 年 度) 殿
- 神 社 大 島 支 部 殿
- 神 社 伊 予 支 部 殿
- 大宮八幡宮 和 氣 須 賀 雄 殿
- 伊予稻荷神社 星 野 暢 廣 殿
- 姫 坂 神 社 沼 崎 守 文 殿
- 大井八幡大神社 榑 部 淨 文 殿
- 金 壹仟円也 廣 島 市 高 村 鶴 郎 殿

- 三 嶋 神 社 堀 川 泰 規 殿
- 白 山 神 社 大 岡 益 子 殿
- 巖 島 神 社 柳 原 磐 根 殿
- 金 參仟円也 護 運 玉 甲 智 益 八 幡 神 社 飯 尾 宏 隆 殿
- 八 幡 神 社 大 野 勘 藏 殿
- ポスタール助成金 金 壹萬円也 姫 坂 神 社 沼 崎 嘉 吉 殿

- 總會助成金 金 壹萬円也 伊予豆比古命神社 長曾我部勝殿
- 金 五仟円也 松山市宮田町 日野 諄二殿

- 時局対策助成金 金 拾萬円也 愛 媛 県 神 社 庁 殿

観月神楽助成金

- 金 壹萬円也 神 社 庁 新 居 浜 市 支 部 殿
- 伊予豆比古命神社 長曾我部勝殿
- 綾 延 神 社 豊 田 栄 年 殿
- 村 山 神 社 榑 田 三 雄 殿
- 宗 像 神 社 合 田 正 良 殿
- 三 島 神 社 近 藤 茂 生 殿
- 三 島 神 社 松 浦 文 郎 殿
- 三 島 神 社 沼 崎 嘉 吉 殿
- 飯 積 神 社 葛 城 光 彦 殿
- 八 幡 神 社 須 賀 神 社 久 米 讓 殿
- 須 賀 神 社 久 米 讓 殿

会員会費納入者名

(61.11.26 現在)

- 堀 田 充 邦 司 藤 原 壽 久
- 吉 野 哲 夫 馬 越 将 文
- 矢 野 宏 川 崎 正 典
- 清 家 貞 一 越 智 治
- 池 内 公 和 別 府 一 静 司
- 御 田 松 俊 寛 高 市 彰 次
- 重 上 正 史 武 智 市 彰 次
- 井 原 宗 正 武 智 市 彰 次
- 相 原 宗 正 武 智 市 彰 次
- 田 内 宗 正 武 智 市 彰 次
- 都 野 清 彦 高 橋 正 康
- 本 多 清 彦 高 橋 正 康

- 田 窪 久 柳 原 宰
- 佐 藤 照 彦 越 智 重 安
- 湊 我 部 英 司 鴨 頭 重 安
- 曾 岡 巧 好 井 上 正 博
- 片 岡 巧 好 井 上 正 博
- 山 本 房 利 史 池 田 和 博

(37名)

お願い / 青年神職会費は四、〇〇〇円
 になっておりますので、未納
 の方は事務局池内迄至急ご納
 付願いたします。
 会費は会運営の基本となるも
 のですので、よろしくご協力
 の程お願い申し上げます。

編集後記

▼寅年の幕明けは護国神社の
 盗難事件から始まりましたが、
 本年も青年らしく神主らしく
 活動していきたいと思えます。
 ▼投稿をお待ちします。
 ▼会報十七号
 正月元日発行の予定でしたが
 一ヶ月も遅れ投稿者にお詫び
 申し上げます。
 (久保)